

畜産講座

暑さを防いで豚の生産性を上げる

近年、改良が進み、日増体量（一日に増える体重の重さ）が1kgを超える豚（50kg以上の体重で・・・）も出てきています。発育速度が速いということとは、たくさん飼料を食べて、自分の体を作っているということです。このため、豚自身の発熱量も多くなります。そこで、暑熱（暑さ）をいかに防いで豚の生産性を向上させるかが、年間の生産性を上げるポイントになってきています。今回、豚の暑熱とその防止策について紹介します。

母豚の暑さ対策

○ 夏場～秋口に種付きが悪くなる原因

暑くなると、繁殖母豚は子豚を分娩した後、産後ストレスと暑熱ストレスにより飼料を食べなくなることがあります。飼料を食べずに、子豚に授乳すると母豚はだんだん、痩せていきます。子豚が飲んでいるミルクには脂肪や蛋白質などの栄養素がたくさん含まれているので、母豚は自分の、それこそ「身を削って」母乳を出すからです。授乳中に痩せてしまった母豚は、授乳中に太った母豚に比べて、排卵数や受胎率が低いことが科学的に分かっています。つまり、母豚は授乳中にしっかり飼料を食べることができないと、その後の成績が悪化するということです。このため、授乳中にいかに飼料を食べさせるかが、成績向上のポイントとなります。6月から9月に種付きがよいと、母豚は10月から1月に分娩します。これらの子豚を肉豚として出荷するのは4月～7月の比較的枝肉単価が高い季節です。ですから、夏場の管理

は収益に直結します。

○母豚の飼料摂取が低下した場合？

妊娠中母豚が食べる飼料の量は市販の配合飼料で 2.0～2.5kg 程度です。しかし、10 頭程度の子豚を分娩した母豚は一日、6.0～8.0kg の飼料を食べないといけません。ほぼ、飽食の状態でもなかなかこの量を食べることができない母豚は少ないのが現状です。授乳期用飼料はエネルギー含量が高く、妊娠期用の飼料に比べて摂取量が少なくても、エネルギーをまかなえるメリットがあります。しかし、飼料中エネルギー含量を上げるために油脂を添加しており、弱った母豚は食べることができないこともあります。暑さで、飼料を食べられない母豚には妊娠期用のエネルギーの低い飼料を給与すると、食べることができる場合もあります。

また、逆に、菓子クズや子豚用人工乳など、甘い飼料を好む母豚もいます。ですから、上記の配合飼料を食べない場合は、配合飼料に菓子クズや子豚用人工乳を振りかけて給与してみてください。

また、分娩後の飼料摂取量低下を予防するために、飼料に重曹を少量（1-3% 程度）添加することも有効です。夏場暑くなると、豚の呼吸が速くなり、体内の炭酸ガス濃度が低下し、血液がアルカリ性になり、母豚は体調不良となり、飼料が食べられなくなります。

飼料を食べない母豚には、水で練った飼料や、青草など、何でもいいので食べさせて下さい。青草は栄養価が高くありませんが、ビタミンを含み、青草を食べることで食欲が増進し、配合飼料を食べ始める場合もあります。青草は何でもいいですが、私の経験ではマオの葉やクズの葉を好む傾向があるようです。母豚の育成時（体重 70kg 以上）から、青草を給与し、青草を食べる習慣を付けておくと、分娩後に食欲不振になっても、青草を食べやすく

なります。休耕地がある場合はイタリアンなどを植えておくと便利です。これでもだめな場合は、ビタミン剤や重曹液の注射を実施することが有効な場合もあります。

* ペットボトルの氷

分娩ストールに入っている母豚に有効です。2リットルのペットボトルを凍らせたものを逆さに吊り下げ、氷がとけた水がちょうど、母豚の首の後ろにポトポト落ちるようにストールの上にセットします。母豚の体温が低下するので、飼料を食べ始める場合もあります。ペットボトルはフタをして、フタに穴を2つあけるのがおすすめです。穴の大きさは水の落ちる速度をみて調節して下さい。

* ミスト＋扇風機（細霧冷房）

ミスト付扇風機や、ミストを飛ばしながら、送風することも有効です。最近、扇風機は畜産用のものもありますが、ホームセンターなどで工場用の扇風機を購入すると安く済む場合もあります。

ミストはミストノズルを購入し、塩ビのパイプ、ジョイント、接着剤など安価な材料で自作できます。広く流通している材料を使うのがポイントです。広く流通している部品は安価なので、修理も簡単で安価にできます。

母豚が飼料を食べなくなると処置しなければならないのは当然ですが、母豚が飼料を食べなくなる前に、暑熱ストレスを予防することが大切です。

強い母豚を作る

先に、授乳豚にいかに飼料を食べさせるかについて書きましたが、夏場に

全ての授乳豚に十分飼料を摂取させることは、難しいことです。これには育成期の母豚候補豚の管理、妊娠期間中の母豚の管理が大切です。

育成期のブタはできるだけ群飼し、十分運動スペースを取ることが大切です。育成期（70kg から種付けまで）の飼料は種豚用飼料を給与します。一般的には 2.5kg/日程度を給与し、初回の種付けが済んで2週間ほど経過したら、2.0kg/日くらいに落とします。これで、初回分娩まで体型を維持します。初産の時に太りすぎていたり、痩せすぎている母豚では事故が多いので妊娠期間中の体型（ボディーコンディション）は大切です。また、同じ飼料摂取量でも痩せてしまう豚や太ってくる豚もいるので、豚の体型により微調整が必要です。産を重ねた経産豚は維持飼料も多く必要となりますので、ボディーコンディションを見ながら、飼料給与量を調節することが必要となります。

種雄豚の暑さ対策

種雄豚の管理も大切です。少なくとも扇風機は豚に当てるようにして下さい。人工授精用の精液を販売している種豚場の最新型の豚舎では、種雄豚舎内では冷房も完備しているほどです。雄豚は夏場精液性状が低下することが多いので、定期的に精液を検査するのが無難です。受胎率が悪くなったら要注意です。夏場の暑気ストレス予防には母豚と同様、飼料へのビタミン剤の添加などが有効です。昼間、気温の高い間は雄豚の乗駕欲が減退します。精液採取や種付けも朝、夕の涼しい時間帯に行う方が、能率が良くなります。また、暑い時期に雄豚の体調が悪くなくても「暑さのせいだ！」と決めつけず、体温測定なども合わせて実施して下さい。感染症などの病気になっているかもしれません。この場合は早めの治療が必要です。また、睾丸炎やカイセン症でも乗駕欲が減退する場合があります。

また、雄豚舎に水浴できる場所があれば水浴も効果的です。深さは 20cm から 30cm 程度で十分です。この場合も扇風機で風をあてます。水浴は汚水処理を確実にできるよう工夫が必要です。また、ミスト散布による細霧冷房も雄豚舎には有効です。このような処置で食欲不振の雄豚も元気になります。

肥育豚の暑さ対策

肥育豚にも暑熱ストレスは大敵です。特に出荷時は要注意です。当日、食肉処理場に搬入する場合はできるだけ、涼しい間に搬入するようにして下さい。また、トラックに積み込む場合はオガ粉を薄く敷き、釣具店や氷店で売っている角氷をいれます。氷がとけた冷たい水が、豚のお腹を冷やしてくれます。また、トラックに積み込んだ後、すぐに走るようにし、豚に風を当てて下さい。つみこんだまま、放置すると、熱射病になり、死亡する場合があります。また、死亡しなくても肉質が悪化し、「しまりのない肉」になってしまいます。出荷前に豚がつかれて、体内に乳酸が蓄積されると筋肉が酸性となり、肉質が悪化しやすくなるからです。晴れた暑い日はもちろんですが、曇ってジメジメした日も要注意です。特に台風の前後の南風が吹くときは注意が必要です。

また、飼料にエコフィードを用いている場合、飼料の変敗にも注意が必要です。変敗した飼料は給与しないようにして下さい。また、肉質向上のために飼料にビタミン E、茶カスなどを給与することも有効です。ビタミン E は特に肉のドロップを少なくする効果も期待できるので、夏場の肉質悪化予防には有効です。茶カスは緑茶粕やウーロン茶粕が良くエコフィードの一部と

して用いられています。茶カスもビタミンEと同様の効果があることが報告されています。また、厚脂になる可能性もありますが、飼料への油脂添加などによりエネルギーを補給することも必要です。暑気ストレスが多いと肥育豚のエネルギー消費も激しくなるからです。

以上の様に、暑気ストレスの予防も基本的なことが多いですが、ちょっとしたことでも継続すると、成績はアップします。皆さんも工夫して夏場を乗り切ってください。